

Title	非Ohm性電流の運動学的理論
Author(s)	康, 舜沢
Citation	物性研究 (1967), 8(5): 277-286
Issue Date	1967-08-20
URL	http://hdl.handle.net/2433/86079
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

非 Ohm 性電流の運動学的理論

康 舜 沢 (京大理)

(6月30日受理)

§ 1. 序

真性半導体においてかけられた電場が強くなった場合には、電気伝導特性は通常の Ohm 電流からずれることはよく知られており、実験的にも理論的にもすでにいくつかの研究がなされている。電場の強さに応じて Ohm 電流からのずれ方が変わることが分っている。電場を次第に強くしていけば、はじめは Ohm 電流次に電場に関して 1 次以下の巾に比例する電流およびある電場の強さ以上のところでは、電流は飽和することが実験的にわかっている。

一方、電気伝導のような輸送現象を微視的な立場からとりあつかう理論的な方法は、古典的にも量子論的にも Ohm 電流に関しては、ある意味で確立されているとみなされるに反し、非 Ohm 電流に関しては一般的な手法はいまだ得られていないのが現状であるといえるだろう。

古典論の適用できる非縮退的な電子系をもった物質に対しては、一般的な方法として Boltzmann の分布函数の方法があり、これは電子系の分布函数を問題にする限りでは、原理的には線型 (Ohm 電流) あるいは、非線型 (非 Ohm 性電流) に限らず、一般的な適用性をもっているといえる。量子効果が無視できないような場合には、電子と電場との相互作用の Hamiltonian を摂動としてとりあつかって、これに関して一次の計算結果が線型電流の輸送係数を与え、非 Ohm 電流は摂動の二次以上の高次の項から得られる。しかしながらこの方法は、摂動論に基いているが故にその適用範囲にはそれなりの限度があり、電場が強くなると使えなくなる。

上にのべたように Boltzmann の方法は一般的な適用性をもっているという利点の故に、これまでの非線型電気伝導理論で主要な役割をはたしてきた。しかしながらこの方法に関しても困難がないわけではない。というのは、非線型効

康舜沢

果，即ち Ohm 電流からのずれが弱い場合には Boltzmann の輸送方程式を解くことは困難ではないが，非線型効果が大きくなるにしたがって困難が増大し，計算機を用いてもその能力には限度がある。

こういう意味で，何かこの外に原理的で実際的にも一般的な適用性をもった理論的な方法が要求されるのであるが，そういうものは見出されていない。

ただ，直接分布函数にうつたえないで，電流が飽和される以前の非線型効果を取りあつかう理論がいくつかある。その中興味あるものとして Shockley の電子温度の概念を用いる方法¹⁾と，黒沢の電子計算機によるシミュレーションの方法²⁾とをあげることができる。

Shockley は格子系の温度 (T_L) と異なる電子系の温度 (T_e) という概念を導入して Ohm 電流が流れるときは $T_e = T_L$ であるが，電場が強くなり非 Ohm 性の電流が流れるところでは， $T_e > T_L$ となる（この場合の電子が hot electron とよばれる）ものとして，エネルギー・バランスの式と，電子・格子相互作用によって，電子がフォノンと衝突して失うエネルギーの表式とから簡単に $E^{1/2}$ (E は電場の強さ) に比例する電流を導びきだすことができた。電子温度という概念を用いて簡単に非線型電流を導いたという意味で興味あり有用であるけれども，電子温度という概念がどれだけの真実性をもって実際の電子状態を反映しているかという点が，微視的な立場からは問題となる。このような点をより定量的に吟味しようとするものに上でのべた Boltzmann の輸送方程式によるもの³⁾がある。

黒沢は何らかの巨視的な意味での仮定を用いずに，いずれかの伝導電子に着目して，その他の電子との相関を無視して格子振動（フォノン）との多数回の衝突にわたる行動を電子計算機を用いて可能なかぎり追跡して非線型特性を示す，電子系の状態をしらべようとする。これの結果のくわしい内容はまだ目にかかれないので，ここではこういう方法が用いられているということだけふれておいた。

この論文では電子温度というような概念と，電子計算機のどちらの助けをもちかりずに，どちらかという上記の黒沢の立場に近い方法で，いくつかの仮定のもとに非線型電流を理論的に導びきだそうとする。

この場合，伝導電子間の相関を無視した上で，どれか一つの電子に着目して

その充分多数回の継続しておこる衝突にわたる平均的なふるまいをしらべる。

§ 2. 電流及びジュール熱の表式

伝導電子は電場によって加速され、フォノンとの衝突によりエネルギーの一部を失い、減速されるものと考えられる。この伝導電子の多数回の衝突にわたる平均の速度が観測される電流に対応する易動度を与えるものとする。この場合、衝突によって失われた伝導電子のエネルギーは、格子の熱振動エネルギーに転化するものとする。又、衝突からその次の衝突のおこる間では、電子は、外部電場による加速力のみをうけるものとする。すべての伝導電子は、質量が m で荷電が e であらわされるとする。

いま、どれか一つの電子に着目して、その Collision duration を無視して i ($i = 1, 2, \dots, N$) 番目の衝突のおこる時刻を t_i とし、 $t_i < t < t_{i+1}$ なる時間でのこの伝導電子の速度を $V_i(t)$ で表わし、 i 番目の衝突直後のこの電子の速度を V_{i0} で表わすことにする。

以上のことを念頭において、外部よりかけられた静電場を E であらわせば

$$m \frac{dV_i(t)}{dt} = eE \quad (1)$$

がなりたつことがわかる。

(1) を時間に関して 1 回積分すれば

$$V_i(t) = V_{i0} + \frac{e}{m} E (t - t_i) \quad (2)$$

がえられる。

i 番目と $i+1$ 番目の衝突の間におけるこの電子の平均の速度を \bar{V}_i で表わせば

$$\begin{aligned} \bar{V}_i &= \int_{t_i}^{t_{i+1}} V_i(t) dt / \int_{t_i}^{t_{i+1}} dt \\ &= V_{i0} + \frac{eE}{2m} (t_{i+1} - t_i) \end{aligned} \quad (3)$$

となる。

さらに 1 番目から N 番目までの衝突にいたるまでの (ここで 1 番目の衝突と

康 舜 沢

しては電場がかけられた後の一定の時間が経過したときにおこるどれかの衝突をえらばよい) この電子の単位時間あたりの平均の速度を $\langle V \rangle_N$ で表わすと

$$\begin{aligned} \langle V \rangle_N &= \frac{\sum_{i=1}^{N-1} \bar{V}_i (t_{i+1} - t_i)}{\sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i)} \\ &= \frac{1}{\sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i)} \left\{ \sum_{i=1}^{N-1} \frac{eE}{2m} (t_{i+1} - t_i)^2 + \sum_{i=1}^{N-1} V_{i,0} (t_{i+1} - t_i) \right\} \\ &= \frac{eE}{2m} \frac{\sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i)^2}{\sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i)} + ne \frac{\sum_{i=1}^{N-1} V_{i,0} (t_{i+1} - t_i)}{\sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i)} \end{aligned} \quad (4)$$

となる。仮定により N を単位体積あたりの伝導電子の数程度の大きさにとった場合、電流の表式は

$$\begin{aligned} J &= ne \langle V \rangle_N \\ &= \frac{ne^2 E}{2m} \frac{\sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i)^2}{\sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i)} + ne \frac{\sum_{i=1}^{N-1} V_{i,0} (t_{i+1} - t_i)}{\sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i)} \end{aligned} \quad (5)$$

となる。

エネルギーに関していえば、電子は電場によって加速され運動エネルギーを増加し、衝突によってその一部を失い減速される。 $i+1$ 番目の衝突によって電子の失うエネルギーを $\Delta \epsilon_i$ と表わすと

$$\begin{aligned} \Delta \epsilon_i &= \frac{1}{2} m \{V_i(t_{i+1})\}^2 - \frac{1}{2} m V_{i+1,0}^2 \\ &= \frac{e^2 E^2}{2m} (t_{i+1} - t_i)^2 + eE V_{i,0} (t_{i+1} - t_i) + \frac{m}{2} (V_{i+1,0}^2 - V_{i,0}^2) \end{aligned} \quad (6)$$

となる。

1番目から N 番目までの N 回の衝突にわたる単位時間あたりの平均のエネルギー

ギー散逸を $\langle \Delta \epsilon \rangle_N$ で表わせば, 式(6)を用いて

$$\begin{aligned}
 \langle \Delta \epsilon \rangle_N &= \frac{\sum_{i=1}^{N-1} \Delta \epsilon_i}{\sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i)} \\
 &= eE \left\{ \frac{eE^{N-1}}{2m} \sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i)^2 \right. / \sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i) + \sum_{i=1}^{N-1} V_{i,0} (t_{i+1} - t_i) \\
 &\quad \left. / \sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i) + \frac{m}{2} \sum_{i=1}^{N-1} (V_{i+1,0}^2 - V_{i,0}^2) \right. \\
 &\quad \left. / \sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i) \right\} \\
 &= eE \langle V \rangle_N + \frac{m}{2} \sum_{i=1}^{N-1} (V_{i+1,0}^2 - V_{i,0}^2) / \sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i) \quad (7)
 \end{aligned}$$

となることがわかる。ここで N は充分大きいので

$$\sum_{i=1}^{N-1} V_{i+1,0}^2 = \sum_{i=1}^{N-1} V_{i,0}^2 \quad (8)$$

とおくことができ、結局

$$\langle \Delta \epsilon \rangle_N = eE \langle V \rangle_N \quad (9)$$

となる。したがって単位体積あたりの伝導電子の単位時間あたりの平均のエネルギー散逸 $\Delta \epsilon$ は

$$\begin{aligned}
 \Delta \epsilon &= n \langle \Delta \epsilon \rangle_N \\
 &= ne \langle V \rangle_N E \\
 &= J \cdot E \quad (10)
 \end{aligned}$$

で与えられる。これが即ちジュール熱に他ならない。

§ 3. 非 Ohm 性電流の導出

ここで次の仮定をする。

(I) 衝突による散乱は等方的で、衝突直後の速度 $V_{i,0}$ は random variable

康 舜 沢

である。

仮定(I)のもとで電流の式(5)の性質をしらべる。

仮定(I)によれば, 式(5)

$$J = \frac{ne^2 E}{2m} \frac{\sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i)^2}{\sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i) + ne \sum_{i=1}^{N-1} V_{i,0}(t_{i+1} - t_i)}$$

において, 右辺才 2 項は

$$\sum_{i=1}^{N-1} V_{i,0}(t_{i+1} - t_i) = 0$$

となるとみなせるので, 電流の表式は

$$\begin{aligned} J &= \frac{ne^2 E}{2m} \frac{\sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i)^2}{\sum_{i=1}^{N-1} (t_{i+1} - t_i)} \\ &= \frac{ne^2 E}{2m} \frac{\sum_{i=1}^{N-1} (\Delta t_i)^2}{\sum_{i=1}^{N-1} \Delta t_i} \end{aligned} \quad (11)$$

となる。ここで

$$\Delta t_i \equiv t_{i+1} - t_i \quad (12)$$

とおいた。

いま, 電場方向を X 軸にとれば, 式(2)から

$$V_{ix}(t) = V_{i,0x} + \frac{e}{m} E (t - t_i)$$

がえられる。ここに $V_{ix}(t)$, $V_{i,0x}$ はそれぞれ $V_i(t)$, $V_{i,0}$ の X 軸方向の成分である。E は電場の大きさを表わす。

この式をさらに時間に関してもう 1 回積分すれば

$$X_i(t) = X_{i,0} + V_{i,0x}(t - t_i) + \frac{e}{2m} E (t - t_i)^2 \quad (13)$$

がえられる。 $X_i(t)$, $X_{i,0}$ はそれぞれ $t_i < t < t_{i+1}$ なる時刻における, 電子の座標の X 成分, および i 番目の衝突がおこる位置の座標の X 成分を表わす。

式 (13) から考えている電子が i 番目と $i+1$ 番目の衝突の間に動く距離の X 軸方向への射影 l_{ix} は

$$\begin{aligned} l_{ix} &= X_i(t_{i+1}) - X_{i,0} \\ &= V_{i,ox} \Delta t_i + \frac{eE}{2m} (\Delta t_i)^2 \end{aligned} \quad (14)$$

で与えられる。

式 (14) を Δt_i に関する 2 次方程式とみなして、 Δt_i に関して解けば

$$\Delta t_i = \frac{-V_{i,ox} \pm \sqrt{V_{i,ox}^2 + 2eEl_{ix}/m}}{(eE/m)}$$

がえられる。しかるに $\Delta t_i > 0$ であるから、複号のうち + だけをとるべきである。故に

$$\Delta t_i = \frac{-V_{i,ox} + \sqrt{V_{i,ox}^2 + 2eEl_{ix}/m}}{eE/m} \quad (15)$$

となる。

式 (15) を用いれば、電流の表式 (11) は、次のように表わすことができる。

$$J = \frac{ne^2 E \sum_{i=1}^{N-1} \left\{ \frac{2ml_{ix}}{eE} + 2 \left(\frac{mV_{i,ox}}{eE} \right)^2 \right\} - \sum_{i=1}^{N-1} \frac{2mV_{i,ox}}{eE} \sqrt{\left(\frac{mV_{i,ox}}{eE} \right)^2 + \frac{2ml_{ix}}{eE}}}{2m \sum_{i=1}^{N-1} \left\{ \sqrt{\left(\frac{mV_{i,ox}}{eE} \right)^2 + \frac{2ml_{ix}}{eE}} - \frac{mV_{i,ox}}{eE} \right\}} \quad (16)$$

式 (16) は、電子の各衝突後の速さ $V_{i,ox}$ および衝突間の距離の電場方向の射影が、電場の強さ E によらないという範囲内において、電流の電場の強さへの依存の仕方を explicit に与えるものとみなすことができる。

したがって次に

(II) $V_{i,ox}$ と l_{ix} は、電場の強さによらないということを一つの前提あるいは仮定とした場合の電流 (16) の電場依存性をしらべてみる。ここでは、電場の強さが条件

$$\frac{m}{e} V_{i,ox}^2 \gg eE l_{ix} \quad (17)$$

康 舜 沢

と

$$\frac{1}{2} m v_{i,0x}^2 \ll e E l_{ix} \quad (18)$$

をみたす二つの場合についてしらべる。

まず条件(17)がみたされるような電場の強さに対しては、式(16)の分母分子を

$$\frac{e E l_{ix}}{\frac{m}{2} v_{i,0x}^2} = \frac{2 e E l_{ix}}{m v_{i,0x}^2}$$

に関して展開してそれぞれ展開の才2項までとすると

$$J = \frac{n e^2 E}{2 m} \frac{\sum_{i=1}^{N-1} \left(\frac{l_{ix}}{v_{i,0x}} \right)^2}{\sum_{i=1}^{N-1} \left(\frac{l_{ix}}{v_{i,0x}} \right)} \quad (19)$$

となる。

ここで電場にはよらない量とし次のもの

$$2 \tau_N \equiv \frac{\sum_{i=1}^{N-1} \left(\frac{l_{ix}}{v_{i,0x}} \right)^2}{\sum_{i=1}^{N-1} \left(\frac{l_{ix}}{v_{i,0x}} \right)} \quad (20)$$

を定義すれば

$$J = \frac{n e^2 \tau_N}{m} E \quad (21)$$

となる。

表式(21)によって表わされる電流がOhm電流に他ならない。 τ_N は電場によらず、熱平衡状態での性質のみによって決定される緩和時間に相当する。(21)が成立するための条件(17)は平均としてみるならば、電場によって伝導電子になされる仕事が、電子の熱平衡状態での運動エネルギー(熱エネルギー)よりも小さくなることを表わし、このような電場の強さのもとでは電流はOhmicになり、その輸送係数は熱平衡状態での量だけによって決定されるという、よく知られた事実がえられるのである。

次に、条件(18)がみたされるときは同様にして、電流の表式は

$$\mathbf{J} = \frac{ne^2 \mathbf{E}}{2m} \sqrt{\frac{2m}{eE}} \frac{\sum_{i=1}^{N-1} l_{ix}}{\sum_{i=1}^{N-1} \sqrt{l_{ix}}} \quad (22)$$

となる。ここで、又、電場によらない量 ζ'_N を

$$\zeta'_N \equiv \sqrt{\frac{m}{2e}} \frac{\sum_{i=1}^{N-1} l_{ix}}{\sum_{i=1}^{N-1} \sqrt{l_{ix}}} \quad (23)$$

で定義すれば、電流は

$$\mathbf{J} = \frac{ne^2 \zeta'_N}{m} \frac{\mathbf{E}}{\sqrt{E}} \quad (24)$$

で表わされる。

条件 (18) は平均としてみるならば、衝突間に電場によって電子になされる仕事は熱平衡状態での電子の熱エネルギーよりも大きい場合に相当し、電場の強さがこのように大きいときには、電流は式 (24) のように Ohm の場合からはずれて、電場に関して $E^{1/2}$ に比例するという結果がえられる。

ここでは一般式 (16) が特定の条件 (17) と (18) をみたす場合の電流の表式を求めた。したがって電場の強さが (17) と (18) で与えられる強さの間の中の間では、電流の電場依存性は (21) や (24) とは異なるものになることが考えられる。

又、条件 (18) では電場の強さには上限がないことになるが、だからといって (24) 式はどんなに強い電場に対してもなりたつとはいいがたいのである。というのは、ここでは条件 (18) のもとで、さらに仮定(II)を用いて、電流の表式(24)を求めたのであって、仮定(II)はどんな強さの電場のもとにおいてもなりたつとは考えられないのみか、むしろ電場の強さにある上限を与えるものであると考えられるからである。実際、実験によれば非常に強い電場のもとでは、電流が飽和することが観測されている。この領域では仮定(II)そのものが破れるものと予想される。

次に、ここでは電子間の相関を無視したことを、もう一度注意しておく。このことは非 Ohm 性電流を与える伝導電子が conduction band にあるものとみなす限りにおいて正当化されるだろう。そうとするならば、ここで導いた非

康 舜 沢

Ohm 性電流 (24) は格子系よりも電子系が高い温度状態になるからというよりも電子の電場方向の速さが、電場によって平均の熱的な速さよりもずっと大きくなるという、より特殊な状態によるものであるというようにいうことができるだろう。

実際の半導体についての仮定(I)の成立の根拠および実験および、他の理論の結果との、より定量的な比較については目下検討中である。

有益な批判と議論をしていただきました、富田先生および研究室の皆様に感謝します。

(1) W. Shockley, Bell. Syst. Tech. J. 30 (1951) 990

(2) 黒沢達美 数理科学 2 (1966) 60

(3) J. Yamashita & M. Watanabe, Prog. Theor. Phys.

12 (1954) 443

J. Yamashita, Progress in Semiconductors, vol. 4

(1960) P63